

聖ヨゼフホーム視察 ヒアリングシートまとめ

1 入所している子どもたちの現状と問題点

* 子どもたちのこと

- ・ 2～18 歳、67 名の児童が入所している。
- ・ 女子棟、男子棟、幼児棟、グループホーム等、児童の性格や生育歴に応じてグループ分けされて生活している。
- ・ 保護者の居ない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童（児童福祉法第 41 条）が入所するが、複数の理由を持って入所している子どもが多く、虐待されている割合はとても高い。85%が何らかの虐待を受けた子どもである。
- ・ 乳児院からずっと施設暮らしの子どもも 20 数名いる。
- ・ 特別支援の必要な子どもが約 20 名いる。（発達障害の診断名がついている、発達・発育に問題がある子）
- ・ 非行性のある子等子ども自身に生きづらさのある子も入所している。
- ・ 中学生以上になると自分の気持ちを押さえきれずにガラスや家具を破壊する場合があります、年間のガラスの修理代だけでもかなりの金額になる。
- ・ 特にグループホームとなると近所の眼もあるので、夜間遅く帰った子や施設を卒業した子が窓から出入りすることなどに神経を使う。ご近所との交流を図るために、庭で餅つきなどのイベントをしている。

* 保護者への対応

- ・ ここ何年かで、親への対応が増加した。
- ・ 施設の職員と親とは手紙等を通じて密に連絡を取っているが、親への対応についてはさまざまな意味で大変厳しいものがある。
- ・ 親との関係調整の仕事が増え、職員の負担や苦勞が増えている。
- ・ 家庭支援相談員を設けている。親との接触を試みるが非常に難しい。精神疾患をかかえる親も多く、子どものいいところ、悪いところをしっかりと伝える。親の話も聴くが、長くなることが多い。
- ・ 基本的には親の元に帰すことを目的にしている。ずっと施設だけでみるようにはしたくない。そのために「親子交流」「親子ノート」を活用。母親の不安を聴く。親を教育する。
- ・ 児相が施設内で保護者と相談などする際、面会している様子を職員が見る。職員も子どもの様子をコメントする。これを重ねることで、休みのとき子どもが家に帰ることができる。
- ・ 児相が判断していろいろな措置が決まるが、先の可能性を信じて、親子を孤立させないよう、長く見守れるアフターケアができる態勢をめざしている。

2 民間・地域の人に求めること

- ・ メディアで誤った施設像が構築され、困っている。暗いイメージは間違いであり、実情を知ってほしい。
- ・ 普通の子が多い。かわいそう、ではなく、ここに居られてよかったね、という温かな目で見てほしい。

* 地域

- ・地域の住人がヨゼフホームのことを知らない、理解していないと実感している。
- ・地域においては児童養護施設としてのヨゼフホームの存在をより多くの方々に知ってもらいたい。
- ・より多くの方々に見学に来てもらいたい。地域への開放を心がけている。
- ・知ってもらい交流をするために、「クリスマス会」「お餅つき」など企画している。行事などに来てほしい。
- ・子どもたちには、施設外のより多くの地域にてさまざまな体験をさせてあげたい。外との接点を大事にして、地域活動にも積極的に参加したいと考えている。

* 民間

- ・民間企業からの寄付や助成金は増えてはいる。
- ・寄付はあるがニーズにあっていないものが多い。
- ・ランドセルは寄付されるのではなく、できれば親が買い与えてほしいと考えている。(それだけ、親がいても施設に入所せざるをえない子どもが多い)

3 行政に求めること

- ・外部に知られていないので、PRに力を貸してほしい。
- ・市報の中にヨゼフコーナーを設けてもらい、今施設が何を求めているかを多くの市民に知ってもらいたい。活動などを定期的に載せられると理解も深まる。
- ・ホームにいる子どもたちは普通の子どもでいずれ地域に出る。施設はオープンに人びとを迎え入れるので、行政はそのパイプ役となってほしい(子育て支援課、児童青少年課、福祉関係の所など)。そのことで、誤解も少なくなると思う。
- ・社会福祉法人として地域に貢献しなければならない務めもあるので、ヨゼフホームの持つ機能を地域の人々に使ってもらいたい(山中湖の施設利用など)。施設のPRをしてほしい。
- ・山中湖の施設を使って施設の子どもたちと地域の子どもの交流プログラムとして「1泊キャンプ」でも市で企画してほしい。
- ・山中湖の施設への企画で市のバスを利用させてもらいたい。

4 その他

(1) グループホームを作ったときの苦労

- ・グループホーム等福祉施設の建設は住民の理解不足もあってなかなか困難である。
- ・グループホームと地域の関係をよくするための努力が必要。職員の努力で近隣の人とお付き合いをきちんとするようにしている。

(2) 18歳退所時の問題点

- ・18歳退所時に家庭復帰できないものへの支援が必要である。
- ・18歳で施設を出るときに居住する場所がない。施設を出てアパートなどに入るが、お金がかかる。
- ・子どもたちが社会を知らないで施設を出ること・・・一般家庭で育ったよりも社会を知らない。施設内で守られて生活している。社会に出て、全部自分一人でしなくてはならない。

悩みや辛さなどを、親代わりに支援できる人が必要。ぜひ育成をしたいし、してほしい。

(3) 今後の展望

- ・昔の「しょくや」のような制度が必要。
地域の中で、住み込みで住居食事を共にして、仕事を覚え社会とつながる制度。夜学にも行ける等もある。18歳退所時の若者へのアフターケアとして市内に開拓したい。
- ・普通の家庭を体験させたい。休日家庭的な一日が過ごせる里親を募集している。
- ・山中湖にクリストロア会がもっているログハウスを、西東京市の青少年のために使ってほしい。

委員考察（感想、意見）

* 施設での生活

- ・自分自身の施設に対する認識を反省した。
- ・子の尊厳、子の有する権利を念頭に、職員の方が精一杯努力を重ねながら、子どもたちがいかに自立して今後の生活を営めるかを支援し続けることは大変長い道のりであって、大変なご苦労があると感じる。
- ・入所している子どもの85%が何らかの虐待を受けた子どもであるという点で、市内で唯一の児童養護施設として大変重要な役目を果たされていることを改めて実感した。
- ・一般の人々には受け入れがたい、信じがたいことも数多くあるのではと、職員の方々のご苦労は大変なものであろうと拝察する。
- ・生活自体は充実しているように見えた。どこの施設もこのように充実しているのだろうか。
- ・施設に入園すればかなり恵まれている。一般家庭とのギャップすら感じる。
- ・きちんと寮のように規則正しく生活をしていて、家庭的な雰囲気もあり、行き届いている施設だった。先生方の努力が感じられた。
- ・親のケアをととても丁寧にされていることがわかった。
- ・親のケアの方が大変とのこと。孤独な子育てになっている人が多くなっているのかもしれない。いつの時代も、子どもが犠牲にならず、幸せに暮らせるようにみんなでサポートしていかななくてはならないと思った。
- ・「普通」の生活をさせることの大変さを知った。守られた環境で職員の方々のおかげで不自由な生活を送れるが、施設を出てから大変なのはわかった。
- ・西東京市内における子どもたちのホームステイ、宿泊体験をたくさんさせてあげたい。

* 退所時の問題

- ・18歳になったら急に外に出されるのは精神的にきついと思った。その先の支援を生かして負の連鎖にならないようにしてほしい。
- ・職員の方をはじめみんなから愛され慈しみをうけながら成長するとしても、18歳を過ぎた後の生活は、それぞれの個性と能力に、どこまで支援できるのが法整備・運用面も含め重要な課題であると思われる。
- ・18歳退所時は、本人が精神的、経済的自立がなければ社会的な自立につながらない。
- ・職員の方の日ごろの支えで精神的なものはカバーできても、経済的自立は就労があつての話である。社会的方策からの就労支援が重要な課題であると考えている。

* 地域との関わり

〔地域住民との関わり〕

- ・ 実際地域の方が施設に入るのは敷居が高くて難しい。「知る」ことが大事だと思う。
- ・ 定期的に市の広報に載せるなどして周知と偏見をなくしていくことが大切である。
- ・ 市報などにヨゼフホームの広報コーナーを作りたいという依頼など、ホーム側の各要望に応えてあげたい。
- ・ 地域住民一人一人の思いでホームに足を運べるようになってこそ開放であるので、住民参加の行事をとおして周知徹底できる広報活動が必要であると考え。例えば市報・社協だよりへの掲載はもとより、他の福祉関係の施設の伝言板的広報誌が発行されると理解しやすいかと思われる。
- ・ 生活全体では地域にある老人会や育成会への働きかけ、また、行事では民間企業・NPO 等への参画要請などの方法で広がりを実現できるように配慮することも必要ではないか考える。
- ・ ホームも社会的貢献活動として施設の利用・貸し出し等もしているとのこと。これらを通じて地域住民あるいは社会団体とも交流活動につなげられるので、大いに宣伝すべきだ。
- ・ 理解し、みんなで支えていこうという住民意識が育たなければ難しいことであるが、子どもたちも地域と一緒に生活をしているという意識で、自分たちからもあいさつや声かけをしてくれると交流もしやすくなるかもしれないと考える。
- ・ PR不足、お互いの理解不足がある。自然体の関わりとはどういうものか議論が必要。
- ・ 地域の人々にその実情を知ってもらおう。地域の大人がどうしたら子どもの命や安全を守るために協力できるのかをともに考えている必要性を改めて感じた。

〔地域活動団体のつながり〕

- ・ 対応して下さった職員さんが「猫の足あと」(岸田さん)の取組み・存在をご存じなかったのには驚いた。市内での取組みを、特にその関係の機関には広報するのを感じた。横のつながりをつくる必要がある。
- ・ ホームだけのことではなく、福祉関係施設、ボランティア活動、福祉活動におけるネットワークシステム構築の周知徹底を行政の側からも義務として支援する方法を考えていくことが重要と考える。

* その他

- ・ 各棟の耐火・耐震対策に不安がある。